

■ 解答・解説

問1 (1) もろや (2) 二本で一組になっている矢。射芸では甲矢 (はや) と乙矢 (おとや) の二本をまとめてこう呼ぶ。ここでは「二本の矢」の意。

問2 (例) 二本持つと、「あとの矢がある」と当てにして、無意識のうちに一本目をおろそかにしてしまうから。一本に集中させるための戒めである。

問3 (1) 「なかれ」=形容詞「なし」の命令形。「～してはならない・～するな」という禁止を表す。(2) (訳) 初心者は二本の矢を持つてはならない。

問4 (例) テスト勉強で「まだ前日があるから今日は少しでいい」と思い、結局直前まで手をつけずに後悔してしまう場面。(自由記述のため解答例)

問5 あてにして／頼りにして。(「頼む」は古語で「あてにする・期待する」の意。)

問6 ア (いいかげんに考えて本気でないこと)。「なほざり」は「本気でない・おろそかだ・いいかげんだ」の意。

問7 イ (意志)。「この一矢で決めようと思え」という、射る人の心づもりを表すため意志。〔当然「ウ」と迷うが、直後の「と思へ」と呼応し、射手自身の決意を述べているので意志とする。〕

問8 いいかげんにする・おろそかにする、の意。現代語の「愚かだ (=ばかだ)」とは異なり、古語「おろかなり」は「不十分だ・なおざりだ」の意で用いられている点に注意。

問9 (1) 四段活用動詞「思ふ」の未然形。(2) 反語を表す係助詞。「～だろうか、いや～ない」と訳す。(3) (訳) たった二本の矢で、師の前で(そのうちの) 一本をいいかげんにしようと思うだろうか、いや思いはしない。

問10 読み=けだい。意味=なまけ怠ける心。仏教語で「修行を怠ること」をいう。

問11 (訳) 自分では気づかないけれども。(「みづから」=自分自身で、「といへども」=～とはいうものの・～けれども。)

問12 (例) 何事も「次がある」と思わず、今この一瞬に全力を尽くすべきだという、人生全般に通じる教え。(40字以内)

問13 ウ (假定・婉曲)。「朝 (が) あるようなことを思い」と、未来のことを婉曲に述べる用法。〔「明日があると思つて」の意で、推量に近いが、体言「こと」に連なるため假定・婉曲とする。〕

問14 (学問・修行などを) 成し遂げよう・実現しようとして心に決める、の意。「期す」は「期待する・あてにする・覚悟する」。

問15 ア (まして)。下に反語を伴い「まして～だろうか、いや～ない」という強調の構文をつくる。

問16 (訳) たった今すぐに実行することがたいへん難しい。／文末が連体形「難き」で結ばれているのは、文頭の「なんぞ (=どうして)」が係助詞的に働き、係り結び(疑問・反語)によって結びが連体形になっているため。

---

問17 (例) 怠け心は本人は気づかなくても師には見抜かれているということ。(25字)

---

問18

ウ。(アは「二つの矢を持つことなかれ」と反する。イは「師これを知る」と矛盾。エは本文にない。)

---

問19 なんぞ、ただ今の一念において、ただちにすることのはなはだ難き (=「今この一瞬を大切にせよ」という主張を述べた一文)。

---

問20 (1) 兼好法師 (2) 鎌倉時代(末期) (3) 随筆

---

問21 (例) 清少納言『枕草子』。〔このほか、随筆の三大作品として鴨長明『方丈記』(鎌倉時代)もおさえておきたい。〕

---

問22 (例) 師は弟子に、一本ごとに気をゆるめず、つねに芸事を嗜むように真剣に取り組む姿勢を求めた。(自由記述のため一例)

---